つれ〳〵草 下

花ハさかりに月ハくまなきをのミ見る
ものかは雨にむかひて月をこひたれこめて
春の行衛しらぬも猶あはれに情ふかし
咲ぬべき程の梢ちりしほれたる庭などこそ
見所おほけれ哥の詞書にも花見にまかれ
けるにはやく散過にければとも
さはる事有てまからでなどもかけるは
花を見てといへるにおとれる事かは
花のちり月のかたぶくをしたふ習ひハ
さる事なれどことにかたくななる人ぞ

この枝かの枝ちりにけり今は見所なし
なとはいふめる萬の事もはしめおはりこそ
おかしけれ男女の情もひとへに逢みるをは
いふものかはあはてやみにしうさをおもひ
あたなる契りをかこちなかき夜をひとりあ
かしとほき雲井を思ひやりあさちか宿り
むかしをしのふこそ色このむとはいはめ望(もち)
月のくまなきを千里(ちさと)の外まてなかめ
たるよりも暁(あかつき)ちかくなりてまちいてたるか
いとこゝろふかう青(あを)みたるやうにてふかきやま

の杉の木末まて見えたる木乃間の影
うちしくれたる村雲かくれのほとまた
なくあはれなり椎柴(しゐしば)しらかしなとのぬれ
たるやうなる葉のうへにきらめきたる
こそ身にしみて心あらん友もかなと
と都恋しうおほゆれすへて月花をはさ
のみめにて見るものかは春は家を立さらても
月の夜は閨のうちなからもおもへるこそ
いとたのもしうをかしけれよき人は
ひとへにすけるさまにも見えす興(けう)する

一段をなしたりけりかくあまたの人は
たちよろづハなかく異なれ花のことよハ
ひとつを立よりあらためしやすまりて
酒のこと連歌してたゞハむかしけれる
ちからなくありとも幾よ波よ是し
ぬらして雪は波ありうらて謡作けると
よろづのおよ垂りけり見る事なしさ
中の人家登見し一段にてかうつけり
ささごといとなそしこそ禄を掛し言
不用なりとも、すなはちよく酒のこと

なくハ囲碁双六なとあそびて機嫌よは
人をもそれでハかりごとはかるふやうに
ゆりなぐしこをもはづてやよたうけれハ
さしすくぬかりく落ちさま落てり
あそびしあひ作一事を見りしこと
まがりてこたへのこりとおもふよつゐてハ
ゆりとぬれてみハしんまぐとなく
ありぬ出おあこ見へんやまるなりて
都の人家ゆしきかるハ瞭ていこみを
ゆくまえしめるハ家内のへきまつ州

人のうしろに候ふはさまあしくも
およびかゝらすわりなく見んとする人
もなし何となく葵かけわたしてな
まめかしきに明はなれぬ程忍ひて
よする車とものゆかしきをそれかかれか
なと思ひよすれは牛飼下部なとの
見しれるもありをかしくもきら〳〵しく
もさま〳〵に行かふ見るもつれ〳〵なら
すくるゝほとにはたてならへつる車とも
ところなくなみゐつる人もいつかたへか

ゆきつらん程なくまれになりて車どもの
らうかはしさもすみぬれはすたれたゝみ
もとりはらひ目のまへにさひしけに成
ゆくこそ世のためしも思ひしられて
あはれなれ大路見たるこそ祭見たる
にてはあれかの桟敷のまへをこゝら行かふ
人の見しれるかあまたあるにてしりぬ
世の人数もさのみはおほからぬにこそ
この人みなうせなん後わか身しぬへきに
さたまりたりとも程なくまちつけぬへし

おほかたなるけハ、あなに水を入てたゝへし穴を
あまたさんにしてくらす事まれにし、と
いふことをきゝてまれくありけるハ、やかて
つれ／＼て都乃中にあらぬ人にまよへるハ
あらへらす一日のうちにとりのさな
御んや多部野（うべの）字（す）墨（とう）こうぬ野（の）山（やま）こりし
とられ数おほかる日ハあまたとくつぬ
日はしられてひけるこはれさくの
作（つく）りてくらうとくほとけしつらへも
よろすつよきをりをよろすこひけぬハ

死期ハ事をまくのまゝ来たりてくる
たりける死体しきなりしを世を
のとのへりハおりひなんやまこころてとも
をのをまさろくの石に行くりてとく
なつへる程はこのまん事にのまゝ
いとくして○たこうすへあらく死とけを
とりめれて我のかつハのまぬとみまと
まくこうそまをのまさしれまめきも程
りハつまものれされよ㓛そりつハをの
いきよいつるハ死りちかきて候知て

訪ひ来れずとも心やすからむ住か
草の庵りハ静に水石ありてあそひぬ
是を無益と思ふハいとをかし
去れバ山のたくミ無常の心をきこえ
ころ乃んやその死りゆきかれつと
してその陣に生しめるにあれ
祭りのあれをなのあらひいふなりとそ
或人のみを物をきらきくせまき御しつ
ありもなく覚し御しをよ此人の御ます
あまりハさらつきにやと思しつと周防内侍の

うらやましひハなれものハあさてとよ
こ寸の葵のうへを物りけりとよめるを
母屋のこ寸りあつかひのうへにかる枯葉を
よめるにし君の集にのせりけるきこえの
ことはりなれバいつあるあつかひにさして
作りしきみとこ御り枕草子にもを
ありしうきさびしきあれのれきるあふひと
いきうつるう月しくなまつしき心
よまた鴨長明の四季のものかたりにも
むかしよなのあつかひハと申りけるとそ

かきつくるのまきとうおもしろくかよふあると
おほせなくいつくしくまつるべき御帳の
うれしくをもて九月九日菊によせ
うつくしきとしへたまひ梅ハこうばいおり
まかしあそへまふてそ枇杷の皇太后宮
うれしきにかなき御帳にて菖蒲
くすだまなとのかれうつ御なるをみて
おりからぬことさらにつけつると弁の
めのとのいひつるをさけよあやめの草ハ
たえまなうるらも侍従かよきしるし

おもしろきかれ木ハ松桜壺ハ紫よし
藤ハひとへなるよし八重桜ハ奈良の都よ
のこ有きことちの比によせておもしろきあり
御かはゆき吉野の花右近のさくらなど
ひとへなるもあまき八重桜ハこよなの
おもしろくとさらくのつきてるまてへをそれ
たえなるさくら桜よりもさまよしたりのつき
くろをむつかし梅ハちるまてをと紅梅
竟とへかなくよりをあかきかりうる
紅梅のまかひそてられをこれたりし

ときに梅ハ桜にさきあひて覚へおとり
けおされて枝にしぼみつきたる心うし
ひとへなるかまづさきてちりたるハ心
とくおかしとて京極入道中納言ハ
なほひとへ梅をなん軒ちかくうへられ
けり京極の屋の南むきに今も二本侍り
柳又おかし卯月ばかりの若かへで
すべてよろづの花もみぢにもまさりて
めでたきものなり橘かつらいづれも
木ハものふり大きなるよし草ハやまぶき

藤かきつばたなでしこ池にハはちす
秋の草ハ荻すゝききちかう萩女郎花
ふぢばかましをにわれもかうかるかや
りんだう菊黄菊もつたくずあさがほ
いづれもいとたかからずさゝやかなる垣に
しげからぬよしこの外の世にまれなる物
からめきたる名のきゝにくゝ花も見なれぬ
などいとなつかしからずおほかたなに
もめづらしくありがたき物ハよからぬ人のもて
興ずる物なりさやうのものなくてありなん

身死て財残る事ハ智者のせさる處也
よからぬ物たくハへおきたるもつたなく
よき物ハ心をとめけんとはかなし
こちたくおほかるまして口をし我こそ
えめなといふものともありて跡にあらそひたる
さまあし後ハたれにと心さす物あらハ
いけらんうちにそゆつるへき朝夕なくて
かなハさらん物こそあらめ其外ハ何も
もたてそあらまほしき
悲田院の尭蓮上人ハ俗姓ハ三浦乃

なにかしとかや双なき武者なり故郷の
人のきたりて物語すとてあつま人こそ
いひつる事ハたのまるれ都の人ハ
ことうけのみよくて実なしといひしを
聖それハさこそおほすらめとも
おのれハ都に久しく住てなれて見侍るに
人の心をとれりとハ思ひ侍らす
なへて心やハらかになさけある故に人の
いふほとの事けやけくいなひかたくて
萬えいひはなたす心よハくことうけしつ

いつはりせんとはおもはねどさびしく
まなき人のさあまりてまつらかい
とほらぬ事おほかるべしあはれ人は
我ることなれときよハきこゝろのまかせなさけ
をしれひとへりよくよわきものなれ
すこしめくるをいふことゝいひてやまぬよろこび
はかりなきを人はあまのまつりぞと
こゝろれ給ふ此一生危ふらぬみ
あらくしらさ聖教のこゝろやかなるをも
とはまもりやとおもひけりこの

一条の桜ちるよく盛ありけの中よ
寺にも住持ありしは不くやうこころ
殊にて三益をたつよふやせ営し給ひ
やれしとみゆるものまた一つとはつね
そのありたつあるえひものおもひを
なるかりきへりたりく御子はおはすやと
とひしよひよりもちゐすと営しつゝ
さてはありあはれてありけり情なき
御心よりもやりしかんといとおもひて
子孫よりも万のあはれをおもひしられと

いつくしきもたゆまぬべき事なり
貪愛(とんあい)のためにまよひてうまれものゝ心より
道悲(どひ)なりなんや孝養(けうやう)のちからばかりにて
子をもちてこそ親(おや)の志はおもひしらるれ
無我にてある人愛敬もするをそなふる
ありがたし おかしき人のよろづよ
へつらひぬるをうれしとみて悪しき下より
おもひくらすは心つとめけり我の人愛
心より慈悲をもとよりしるん
おやのための書子のためはあはれ

ぬすみをしつるよりまされてぬす人を
いましめひとつとせんよりは
無欲の人をたつとびぬれは世をは
をさむるはまほしきなり人つねの飢寒(きかん)
時は常(つね)の心なし人ごとはまことにぬすみを
世すぎまうけもして凍餒(とうたい)の色こそあらで
とりみるのたばへらす人ぬくるしめ
法をさだめしはつぐなれとつくるなん
不便(ふびん)のわざなりいかにして人を
めぐみへことなるものなりつゝけを

所をやめ民をなてゝ農(のう)をすゝめハしもに
利あらん事うたかひあるへからす衣食(えじき)
よのつねなるうへにひかことせん人をそ
まことのぬす人とはいふへき
人の終焉(しうえん)の有さまのいみしかりし
事なと人のかたるをきくにたゝしつか
にしてみたれすといはゝこゝろにく
かるへきをおろかなる人はあやしく
ことなるさうをかたりつけいひし
ことはもふるまひもおのれかこのむかた

にほめなすこそその人の日来の本意にもあ
らすやとおほゆれこの大事ハ権化(ごんけ)の人も
さたむへからす博学(はくがく)の士もはかるへからす
おのれたかふ所なくは人の見きくにハよ
るへからす
栂尾(とがのお)の上人みちを過(すぎ)給ひけるに河にて
馬あらふをのこあしあしといひけれは
上人立とまりてあなたふとや宿執開発(しゆくしふかいほつ)の
人かな阿(あ)字阿字と唱(となふ)るそやいかなる人の
御馬そあまりにたふとくおほゆるはと

尋給けれハ府生殿の御馬に候と答けり
こハめてたき事かな阿字本不生にこそ
あなれうれしき結縁をもしつるかなとて
感涙をのこはれけるとそ
御随身秦重躬北面の下野入道信願を
落馬の相ある人なり能々慎み給へと
いひけるをいとまことしからす思けるに
信願馬より落て死にけり道に長しぬる
一言神のことしと人思へりさていかなる
相そと人問けれハきハめて桃尻にして

沛艾の馬をこのみしかハこの相をおほせ侍
りきいつかハ申あやまりたるとそいひける
明雲座主相者にあひ給ひておのれもし
兵杖の難やあると尋給けれハ相人
まことにその相おはしますと申いかなる
相そと尋給けれハ傷害のおそれ
おはしますましき御身にてかりにもかく
おほしよりて尋給ふこれすてにその
あやうきのきさしなりと申けりはたして
矢にあたりてうせ給にけり

灸治あまたゝ所に成ぬれハ許すみにけれ
ハとの事ちらく人のいひさためなり
格式なりを見しすとて
四十以後の人身に灸をくはへて三里を
やかされハ上氣の事あり必灸をし
鹿茸を鼻にあてゝかくへからすちいさき
き虫ありて鼻より入て脳をはむといへり
能をつくしえす人よくせさらんかたは
なましいに人にしられまうしく
ならひおさへしらんといふ心よく

うちとけにいふかれといふ人一藝を
ならひおほゆることなし必堅固にうるは
しくかきとよの中にましてこそ
わかりてこそすつまるくまなく
たしなむ人天性天骨なれともたよ
りつますみちりをきしつ年を送まハ
堪能のたしなまさるにまさハ終によの
位りいたりくうけ人にゆるされく
ならひおよほとなりて天下の
とよとなりて始をも不堪なりもなり

上下の瑕瑾もなかりけれとも人々の
まねをたゝしくさまをあらためくし
放埒をされて世のなかをすてよろつ人の
師となる事諸芸かゝりへつらす
或人のいふ年ゝよりなまてよくなるへき
されは藝をはまつへこなりなけと習へき
行末をかし老人の事をは人もえわらはす
気よましりうらもあいなくみくるし
大かたよろつの事はさハやかにいひ頭ある
ころうかやまくなりてほしけれ

世俗のつよたてうかりて生涯をくらすは
下通の人わりゆりしくあかえん事也
まゝなりうきくとをにらせむきは老りなハ
あかれらなつゝすしてわれにてもよき
望ことなしてやまんハ一生一の事なり
西大寺の静然と人ありしまゝ眉ちか
両ことりとくおまたつる紀をく門意へ
まいりまたりけるを西園寺の内大臣殿あ
なたりより気多やとて信仰のこゝろなる
それハ資翔てさまをみてかしめより

さふらふと申されけり後日にむく犬の
あさましく老さらほひて毛はけたるを
ひかせて此気色たうとくみえて候
とて内府(だいふ)へまいらせられたりけるとそ
為兼(ためかね)大納言入道めしとられて武士(ぶし)とも
うちかこみて六波羅(ろくはら)へゐて行けれは
資朝(すけとものきやう)卿一条わたりにてこれを見てあ
なうらやまし世にあらん思出かくこそ
あらまほしけれとそいはれける
此人東寺の門にあまやとりせられけるに

かたわ者とものあつまりゐたるか
手も足もねちゆかみうちそりて
不具にことやうなるをみてとりとりに
たくひなきくせもの也もつとも愛する
にたれりと思ひて守り給ひけるに
やかてその興つきてみにくゝいふせく
おほえけれはたゝすなほにめつらしか
らぬものにはしかすと思ひて帰りて後
この間うへ木をこのみてことやうに曲折(きよくせつ)
あるを求(もとめ)て目をよろこはしめつる

かのかたは愛するなりけりと興なく
おぼえければ鉢に植られける木どもを
皆ほり捨られにけりさもあるべき事也
世にしたがはん人はまづ機嫌をしるべし
ついで悪き事は人の耳にもさかひ
心にもたがひて其事ならずさやうの
折節を心得べきなり但病をうけ子うむ
死ぬる事のみ機嫌をはからずついで
あしとてやむことなし生住異滅のうつり
かはる実の大事はたけき河のみなぎり
ながるゝがごとししばしもとゞこほらず
たゞちに行ひゆくものなりされば
真俗につけてかならずはたしとげんと
思はん事は機嫌をいふべからずとかくの
もよひなく足をふみとゞむまじきなり
春くれてのち夏になり夏はてゝ秋のくるには
あらず春はやがて夏の気をもよほし
夏よりすでに秋はかよひ秋はすなはち
さむくなり十月は小春の天気草も青く
なり梅もつぼみぬ木の葉のおつるもまづ

おちてめくむにはあらす下よりきさし
つはるにたへすして落る也むかふる気
下にまうけたるゆへにまちとるついて
甚はやし生老病死のうつりきたる事
又これにすきたり四季ハなを定まれる
ついてあり死期ハついてをまたす死ハ
まへよりしもきたらすかねてうしろ
にせまれり人皆死あることをしりてまつこと
しかも急ならさるにおほえすして来
おきのひかたはるかなれとも磯よりしほのみ
つるかことし

大臣の大饗ハさるへき所を申うけて
をこなふつねの事なり宇治左大臣殿ハ
東三条殿にてをこなはる内裏にてあり
けるを申されけるによりて他所へ行幸
ありけりさせることのよせなけれとも
女院の御所なとかり申故実なりとそ
筆をとれはものかゝれ楽器をとれハ音を
たてんとおもふ盃をとれハ酒をおもひ
さいをとれハ攤うたん事をおもふ

かなしむべきにあらず誹りうきことを不善
たりとさだめとはいへる事あることはり
聖教の一句をきゝて何ぞ前後の文
も見ず章をはなれて其文の非とあらそ
むかしをたづねふかき其文をひろけ
ざらましかば世の中しらんや是等
をつて所の義なり心文にあたるすとも
佛前にたむけをすゝとより理をとして
とかくうちても善業をあつむる勝手なれ
敬礼のゆかりをも縄床に坐をとるは覚束なし

て禅定あるべして事理を二つにわか
おねもしそむるこれは門跡のあるべき大
すもの不信とよくいへる事あるべきにや
是をたとへなして
画のうごきをまづるすはいつのみえなるを
或人のかたねきをほむしよ凝固と申伝は
うごきなるをまづるやゆるんと申
伝はなにはたゞる事無益なり流れ
とのうして只乃つよくる所を乗く
ぬりもて伝へ給まして

小なむすびといふハ糸をむすびつけね
ころが捲といふ見ゆれハ□と
あるひハすりよく人御しまいらするなと
いふハあやまちなり
門り鬱魁呂をかけといふはよろしからぬや
勘解由小路の二示猫つハ窮こうくる也
ゆるまひとさ見お宏様数もよろしからぬ
まやひろをまかけるをはつねのすや
様数かまふれといふて護摩く
といふも門ろし御まつ護摩修行

行法しけの字をすてゝいふハわろし濁て
いふと清凉るの僧正御しまいらせつねなり
稲のよろ乳車のことなり
花のさかりハ祭頭なき百ヶ千日とも
時正の後七日ともいふと立春なき七十五日
おかやすハたかの守
遍照寺のてうじ僧正池の名を見ゆひ
つけく堂のちらまさえをまいらせ君ひこう
あきられて数もしし寸入おほきに後
そのまもいりくたそこそてこうへ候

あそしけるようかひおほろしくきこえて
ゐるを聞けれハすゝ人につゝましけれハ
村上のことも申さりてへくらうよ
大覚寺さるゝにあつる中に法師まし
まくらうゑてちゑ候これハ此法師を
こうつる所よりも使庁へつかしたりけり
あるすとあるを鳥をとひよりけるさゝて
禁獄せられけり基俊大納言別当
の時になん侍りける
太衝乃太の字点ありやなしといふ事

陰陽のともから相論の事ありけり
盛親入道申侍りしハ吉平か自筆の
占文のうらにかゝれたる御記近衛殿の
関白殿にあり点うちたるを書たりと
甲子夜の人あひたかひに点ありやなしや
事ありしかとも申さす云家にありしをもちゐるに
あらハ世尊寺の家に伝ハり世の字説人あつ
是非自他の家に失あらハ得ましき
あれをもちたるゆへに蓋ありけり
ありといふことをしるす

あつまの人は都の人にまじはりけり都の
人はあつまに行とてそのみをたて寺山
をもすれば顕密の僧まさる僧に
あらずして人にまじはるべし
人のいとなみはかつる口さんなるはつきの
日に堂仏をつくりくろめあかり金銀
珠玉のうつくしさをつくして堂をたてんと
まうけはからはそのかまへをしつらひてよく
安堵しくんや人見気なるを見るなく
下にも消えること雪のごとくなりけり

ときなる事いへるをまいりて法あるへし
一念にさとりぬる人ありぬるのちの事
のちみをあられ堂のそれりまするは
示くよそに見捨しむとなれば心をま
思ふる事作るなまなれともよりわろく
おほえけりたるぬるのうちやましく
おもしるあるまじやましきなりけりば
なんとなくなりしか知恵をさむて
人ありけるそれは六角なるその堂を
るかき井なるものこにるのみ寺

たぐひなり人ハとしてハ器ありがたくす
おとれるをバ侮るを嫌ふ事他よ病なる
ことのあるも大なる失なり不学のたぐひ
ハなくも才芸のあるハなくも先祖の
誉なくも人に勝れりとおもひて人を
たかひて祭りなどいはねども
内心にそこばくのとがを作しみだく
事をかまへてをこなひみえし人をも
いひおとしめいひなしもまねくものなり
此慢心なり一念をも病てしよ死ぬる

人ハミつからあきらかなる非をしる故に
あらそひつねに見くるしくて終り
おほかる事也
年老たる人ハ芸一事をきはむるものにて
て此人のためには誰よりこそすぐれといひたるも
老のゆくすゑいふをもちてつゝむ事ハ寸
さハあまたを我もわすれたる所の事とは
一生此身をくれにならずと作さなく
見ゆれ今ハ忘れにならずといひくたりたるも
あかつきまでありとてもするよし

ちらすはさばかりの才にはあらぬにやと
きこえおのづからあやまりもありぬべしさ
だかにもわきまへしらずなどいひたるは
なほまことに道のあるじともおぼえぬべし
ましてしらぬ事したりがほにおとなしく
もどきぬべくもあらぬ人のいひきかするを
さもあらずと思ひながらきゝゐたる
いとわびし
何事の式といふ事は後嵯峨(ごさが)の御代
まではいはざりけるをちかきほどよりいふ詞
なりと人の申侍りしに建禮門院(けんれいもんゐん)の右京大夫
後鳥羽院(ごとばのゐん)の御位の後またうちずみしたる
ことをいふに世のしきもかはりたる事は
なかりしとかきたり
さしたる事なくて人のがり行くはよから
ぬ事なり用ありて行たりともその事は
てなばとくかへるべし久しくゐたるいとむつかし
人とむかひたれば詞おほく身もくたびれ
心も閑(しづか)ならず万の事さはりて時をうつす
たがひのため益なしいとはしげに

いかにもわろし心つよからぬ事ある舞
折ハ中々しくきよしともみえてあはれなるに
むつハまほしく思ふ人のつましくあるき
腹立しきにハ心静になをといひなして
け隙(うらみ)にハあらざれど阮籍(げんせき)があをき眼
誰もあるべき事なりとしるよ
人のそしりのかるよ物語してのつりめ事
いとよしみえもみえしくこしこしやうそ
なとするをつひとをもせらるゝいとられ
見とおかしく人の我まへなるをハましく

ようさくわらして人の袖のきぬさきの
下まへ目をくりまなおかるとらは人あり
おぼつかぬよくおかしきとは余所まく
わりなくうるとはみしけしてちのうみを
おかしやうなれとおかしおかしなり
こなたのすゝよりとそてたゝむ
むつかしりとまかりてたしなは
あらす我よりそこよくみえたちなる
かりそめをまくよりまはそてなる名
必あらぬ第の事かなむこそ求へらす

只志ゝとをたゞしくもて清献(せいけん)公のた
とはかりぬ事を行して芳福をなす
なれどこの世をたもちえんもしくや
御心内をつゝしまずのろくほしきま
ゝにみだりなれて遠国のわすれむく
引しめそてなをまつてはもしは風にあへるを
湿(しつ)よりして病を邪霊(じやれい)よりうくるは愚(ぐ)なる
人なりと醫書(いしよ)にいへり、いつはりしも同じ
また此人慾(よく)悋(りん)をやめ恵をほどこし
ことをたゞしくせば夜をも紀をはゞかるまじん

事をしらざりし禹(う)のゆるさく三苗(べう)
を征(せい)せしをいくさのしわざして速なく
りしは志のあらりき
わきまへ血氣(けつき)のあまるを心をおもり
うちかち情欲(じやうよく)おもはし身をあやふめそ
くらけやまふる事に及びてしらしむるよ
げなし美麗(びれい)をこのみて實をしなし
是をまるく苔(こけ)の様(たま)りやつまつさる心
さのまゝしてものとなかにかゝはり
しやこゝろのことあるよほいまゝす

ゑりうりみけりよめてりといさきよく
して百日の身をあやまり気をとり清
たゞし孫のたらしくして身のまたく
ひさしかるへき事を思ふ事をまちかよ
おろかのみくなりし世かりとをなす
身をあやまつてはかきりの志ゆきも
老ぬる人ハ精神おとろへありてところその
かして感しかたくこゝろれしおろ
なのつゝしみしれて長益にいさを
なすりをたもちて短きへ人のまつい

なきん事をおりよ老て智のいさ行よ
まされる事かくしてこゝろの老
ゆるへて徳をまされるうたとし
小野(をの)小町(こまち)の事こいあるくゆるの行す
於ところへこゝろの段ハ玉造(たまつくり)といふ文あり
みしうり此文清行(きよゆき)かわれりといふ説(せつ)
あまた高野(かうや)の大師の御作(さく)の目録(ろく)あり
又かり大師ハ義和(せうわ)の頃しかまよくまとめ
かり小町かさかりを行る事ゑよの事
まやなき誠おぼつかなし

小鷹によき犬大鷹につかひぬれハ小鷹に
わろくなるとて大につき小をすつる
ことハり誠にしかなり人事おほかる中
に道をたのしふより気味ふかきハなし
是実の大事なり一たひ道をきゝて是に
志さん人いつれのわさかすたれ
さらん何事をかいとなまんおろかなる
人といふともかしこき犬のこゝろに
をとらんや

世にハ心えぬ事のおほかるなりともある
ことにはまつ酒をすゝめて志ゐて飲
せたるを興とする事いかなるゆへとも
心えす飲人のかほいとたへかたけに
眉をひそめ人めをはかりてすてんとし
にけんとするをとらへてひきとゝめて
すゝろに飲ませつれはうるはしき人も
たちまちに狂人となりてをこかましく
息災なる人も目の前に大事の病者
となりて前後もしらすたふれふす
いはふへき日なとはあさましかりぬへし

あくる日まてしらつくそのくたす
みなひかし生れへそてたゝやみなく
此身の事若しけおおやきワさくし
の大事をうちくまつひとわら人を
てしれめると兄まうつ道悲もなく礼
義みもそむ仍り不くしきみよあのこと
人損く口おしと思ハこうんや人の国よ
うれあう死忌とおもりとあるよもこさ人
事みさ作らるへやうらんハあやしく不思議よ
おもしむ思し人のうへまくみつるたり

心うしとハへるこ國よちうよくしや
兄し人てはおよ所なくうひのたり
云來おかく忘おうしゆきとひもなし
なきたく不けくようハ程よ行しき
日比の人とくおもし寸共ハ死ろひうみ
なわうるよおさやりまはゆうるすうは
うらさけくもうるうひ盃もてうるよ
よりつよしぬ人ハさうれよりて口よ
こしあくすつうしもとひかるこ國あし
都のうちりつうしてそのしうたひまひ

としおいたる法師めし出されてくろく
きたなき身をかたぬきて目もあてられすすち
りたるを興しみる人さへうとましくにく
し或は又我身いみしき事ともかたはらいた
くいひきかせ或は酔なきし
しもさまの人はのりあひいさかひてあさ
ましくおそろしはちかましく心
うき事のみありてはてはゆるさぬ
物ともおしとりて縁よりおち馬車
よりおちてあやまちしつ物にものらぬきは

大路をよろほひゆきてついちかとの下
なとにむきてえもいはぬ事とも
しちらし年老袈裟かけたる法師の
こわらはのかたをおさへてきこえぬ事ともいひ
つゝよろめきたるいとかはゆし
かゝる事をしてもこの世も後の世も
益あるへきわさならはいかゝはせん
この世にはあやまちおほく財をうしなひ
病をまうく百薬の長とはいへと万の病
は酒よりこそおこれうれへわするといへと

殊さら人は思ひすごさぬことゝこそいへ
なくめる後の世は人の智恵をうしなひ
菩提をやく事火のごとくして悪をまし
よろづの戒をやぶりて地獄に墮在し
酒をのみて人にのませける人は五百生の手
なき者に生るとこそ仏は説給へれ
かくいましめおかれたれどそのつゝ
桜さきちりて月の夜雪のあした
花のもとみちのほとりにおもしろしと
遊興しける万葉集を見るに有けり

つましくかりし日ごろのかたらひ友に入殊に
よりをこなひゝろをもころなく心を
すましつゝあかりの御簾にうつらふを
ゆくゝおもみすゝきとよむやかる事なひ
して何しむこれろいくはしみてやかりける雨
かく火みつゝおもひ夢にしてへうそれよりも
こゝむらひてもおもふのまゝなるいとおかし
郷の草庵野山などみて遊ぶなる
などにひとそのうへりくのまゝこゝろも
おしいうつむ人は其志あらはれく

はこしのみたるもいとよしよき人の
とりわきて今ひとつうへすくなしなと
のたまはせたるもうれしちかつかまほしき
人の上戸にてひしひしとなれぬる又うれし
さはいへと上戸はおかしく罪
ゆるさるゝものなり酔くたひれてあさゐ
ねしたる所をあるしのひきあけたるに
まとひてほれたるかほなからほそき
もとゆひさし出しものもきあへすいたき
もちひきしろひてにくるかいとりすかたの

うしろてけおひたるほそはきのほと
おかしくつきつきし
黒戸は小松のみかと位につかせ給て
むかしたゝ人におはしましゝ時まさな
ことせさせ給ひしをわすれ給はてつねに
いとなませ給ける間なりみかまきに
すゝけたれは黒戸といふとそ
鎌倉の中書王にて御鞠ありけるにあめ
ふりてのちいまた庭のかはかさりけれは
いかゝせんと沙汰有けるに佐々木隠岐入道

鋸(のこぎり)のくひを車よりみておちてなすりへきを
それを一度よしたれさ泥土(でいど)のよごれい
なるをくりとるあらん用ところし
此人識しあつりなをあらすをあさしあし
かりつてふてしり吉田中納言の
うけたまはるこれよういやるなるをくるとみる
ありさましけるはなるしーうりこい
見しとおもひける鋸(のこぎり)のくひやしく
ことやうの事なり庭の儀をなすものなる
人うけたまはることをまふらは教訓也とて

或所のさむらひとて門徳の御弥學を
見る人ありけるとて寅劍(ほうけん)をはその人を
あらはれつかひ梅をこそてられなき
女房の中よ到彼の行幸よは畫御座の
御劍あまと志のひやかよいれ
ふもしのなくかきこその人かなこ典侍(ないしのすけ)
なりけるかや
入宗(にふそう)乃沙門を服とし人一切經を持誦して
六波羅のあるをやけ跡とよとどろよ
安置(あんぢ)してあとよ首楞嚴(しゆれうごん)經を読して

那蘭陀寺と号すその聖の申されし
那蘭陀寺ハ大門北むきなりと江帥の説
としていひ伝へたれと西域傳法顯傳なと
にも見えす更に所見なし江帥ハいかなる
才学にてか申されけんおほつかなし
唐土の西明寺ハ北むき勿論なりと申き
さきちやうハ正月うちたるきちやうを
真言院より神泉苑へ出して焼あくるなり
法成就の池にこそとはやすハ神泉苑の
池をいふなり

ふれ〳〵こ雪たんはのこゆきといふ事
よねつきふるひたるに似たれは粉雪と
いふたまれこ雪といふへきをあやまりて
たんはのとはいふなりかきや木のまたにと
うたふへしとある物しり申きむかしより
いひける事にや鳥羽院おさなく
おはしまして雪のふるにかく仰られける
よし讃岐の典侍か日記に書たり
四条大納言隆親卿乾鮭と云ものを
供御にまいらせられたりけるを

あやしき物まいるやうあらじと人の申
けるをきゝて大納言鮭といふ魚まいらぬ
事にてあらんにこそあれさけのしらぼし
何条事かあらんあゆのしらぼしは
まいらぬかはと申されけり
人つくうしをば角をきり人くふ馬をば
耳をきりてそのしるしとすしるしを
つけずして人をやぶらせぬるはぬしの
とがなり人くふ犬をばやしなひかふ
べからず是皆とがあり律の禁なり

相模守時頼の母は松下の禅尼とぞ申ける
守をいれ申さるゝ事ありけるにすゝけたる
あかりしやうじのやぶればかりを禅尼
手づから小刀してきりまはしつゝはられ
ければせうとの城の介義景その日のけ
いめいしてさぶらひけるがたまはりてなにがし
男にはらせ候はんさやうの事に心得たる
ものにて候と申されければその男尼が細工
によもまさり侍らじとてなを一間づゝ
はられけるを義景みなをはりかへ候はんは

はるかにやすく候へしまたらに候も
見くるしくやとかさねて申されけれハ
尼も後ハさはさはとはりかへんと思へとも
けふハかりハわさとかくてあるへきなり
物ハやふれたる所はかりを修理(しゆり)して
用ゐる事そと若き人に見ならはせ
て心つけんためなりと申されけるいとあり
かたかりけり世をおさむる道倹約(けんやく)を
もとゝす女性なれとも聖(せい)人の心にかよへり
天下をたもつ程の人を子にてもたれける

まことにたゝ人にはあらさりけるとそ
城陸奥守(むつのかみ)泰盛(やすもり)ハさうなき馬のり成
けり馬をひきいたさせけるに足をそろへて
しきみをゆらりとこゆるを見てハこれハ
いさめる馬也とて鞍(くら)をおきかへさせけり
又足をのへてしきみにけあてぬれハ是ハ
にふくしてあやまちあるへしとてのらさ
りけり道をしらさらん人かはかり恐(おそれ)なんや
よし田と申る馬のりの申侍りしハ
馬ことにこはきものなり人の力あらそふへからすと

しるへしのるへき馬をハまつよく見て
つよき所よはき所をしるへし次に
くつわ鞍の具にあやうき事やあると
見て心にかゝる事あらハその馬をはすへ
からす此用意をわすれさるを馬のりとハ申
なりこれ秘蔵の事なりと申き
万の道の人たとひ不堪なりといへとも
堪能の非家の人にならふ時かならす
まさる事ハたゆみなくつゝしみて
かろ〳〵しくせぬとひとへに自由なるとの

ひとしからぬなり芸能所作のみにあらす
おほかたの振舞心つかひもおろかにして
つゝしめるハ得の本なりたくみにして欲
しきまゝなるハ失の本なり
ある者子を法師になして学問して
因果の理をもしり説経なとして世わたる
たつきともせよといひけれハをしへの
まゝに説経師にならんためにまつ
馬にのりならひけり輿車ハもたぬ身の導師
に請せられん時馬なとむかへにおこせ

たらんにもゝしりにておちなんはこゝろうか
るへしと思ひけりつきに佛事の後
さけなとすゝむることあらんに法師の
むけに能なきは檀那(だんな)すさましく思ふ
へしとてはやうたといふ事をならひけり二つの
わさやうやうさかひに入けれはいよいよ
よくしたくおほえてたしなみけるほとに
説経ならふへきひまなくて年よりに
けりこの法師のみにもあらす世間の人なへて
この事ありわかきほとは諸事につけて

身をたて大きなる道をも成し能をもつき
学問をもせんと行末ひさしくあらます
事ともは心にはかけなからよをのとかに
おもひてうちおこたりつゝまつさし
あたりたる目の前の事にのみまきれて
月日をおくれは事々なす事なくして
身は老ぬつゐに物の上手にもならす
思ひしやうに身をももたすくゆれとも
とりかへさるゝ齢(よはひ)ならねははしりて
坂をくたる輪(わ)のことくにおとろへ行

されハ一生のうちむねとあらまほし
からん事の中にいつれかまさるとよく
おもひくらへて第一の事を案し定て
その外ハ思ひすてゝ一事をはけむへし
一日の中一時の中にもあまたのことの
きたらん中にすこしも益のまさらん
ことをいとなみてその外をハうちすてゝ
大事をいそくへきなりいつかたをもすて
しと心にとりもちてハ一事も
なるへからすたとへハ碁をうつ人一手も

いたつらにせす人にさきたちて小を捨
大につくかことしそれにとりて三の石を
すてゝ十の石につく事ハやすし十を
捨て十一につく事ハかたし一つなりとも
まさらんかたへこそつくへきを十まて
成ぬれはをしく覚えておほくまさらぬ
石にハかへにくし是をも捨すかれを
もとらんと思ふこゝろにかれをもえす
これをもうしなふへき道なり京にすむ人いそきて
東山に用ありてすてにゆきつきたりとも

西山にゆきて其の益まさるへき事を
思ひえたらは門よりかへりて西山へ行く
へきなりこゝまてつきぬれはこの事をは
まついひてん日をさゝぬ事なれは西山の
事ハかへりて又こそおもひたゝめと
おもふ故に一時の懈怠(けだい)すなはち一生の
懈怠となる是を恐るへし一事を
かならす成さんとおもはゝ他の事の
やふるゝをもいたむへからす人のあさけり
をもはつへからす万事にかへすしてハ

一の大事成へからす人の数多ありける
中にてある者ますほのすゝきまそほの
すゝきなといふ事ありわたのへの聖
此事を伝へしりたりとかたりけるを
登蓮(とうれん)法師その座(ざ)に侍りけるか聞て雨の
ふりけるにみのかさやあるかしたまへ
かの薄の事ならひにわたのへの聖
のかりたつねまからんといひけるをあまり
ものさはかしあめやみてこそと人のいひ
けれは無下の事をも仰らるゝ物かな

人の気ハ高のなれまはりもまはりそのうへハ
我を志すよ一生を送るは易きことやそ
りまいそて行作なれば修よけつまと
やゝ修えくろうてつりゆしくたのまれ
むかいばかり数こそハまれつて切なりよう
綺語といふ文よりも修るをめすことを
よろしくおもひ入れやすよ一大事
因縁をそへふまへつとむる
けふハその事をなさんとおもへとあらぬ
いそぎまづ出来てまぎれくらしまつ人ハ

さはりありてたのめぬ人ハ来りたのミたる
方の事ハたがひて思ひよらぬ道ばかりは
かなひぬわづらハしかりつる事ハ
ことなくてやすかるべき事ハいと心ぐるし
日々にすぎ行さま兼て思ひつるには似ず
一年のうちもかくのごとし一生の間も
しかなり兼てのあらまし皆違ひ
ゆくかと思ふにおのづから違ハぬ
事もあれバいよいよ物ハ定めがたし不定
と心得ぬるのミまことにてたがハず

妻といはるゝものこそこれありけれ
わすれかたき椙まゝにつくなとこそきこそ
ちゝろこそなれ誰かしの解りけりぬるゝ
みいのけものをとりまつるあひ結なと
さつきて世下よ見をとりきゝけり問さ
けりことなる事けよめをよしと云
情なそてなるにいみえめとやしくを
をしりきれしよきに女なるハちの男とう
顔かくしてあの佛と修りるきみえけるか
たとへをさりなきよつてとおもひしぬてし

ましてむかしのことをこころおきめなる
かいと口おしく子なとそこつくりし情に
あはしかる心かしおとこれなりてな
庵かけりし年よはなきかな成なき
跡まであさましいけり女けりしあけ暮
かいえよはいとゝのけさなくつくるさなん
女のるあとも来荒よつかなるかよなるう
とれくりよいをまんてかしと月隆てし
たしぬなかいたなかめあうしさ修りこそ
こまきぬると世にハめかしかきぬてし

夜に入て物のはえなしといふ人いと
くちおしよろづのものゝきらかざ
りいろふしもよるのみこそめでたけれひるハ
ことそぎおよすけたる姿にてもありなん
夜ハきらゝかにはなやかなる装束
いとよし人のけしきも夜のほかげぞ
よきハよくものいひたる聲もくらく
てきゝたる用意あるこゝろにくし匂ひも
ものゝ音もたゞよるぞひときはめでたき
さしてことなる事なき夜うちふけて

まいれる人のきよげなるさましたる
いとよしわかきどちこゝろとめて見る
人ハ時をもわかぬものなれハことに
うちとけぬべきおりふしぞけはれなく
ひきつくろはまほしきよき男の日くれて
ゆするしめも夜ふくるほどにすべりつゝ
鏡とりてかほなどつくろひて出るこそ
をかしけれ
神仏にも人のまうでぬ日夜まいり
たるよし

くらき人の人をはかりて智をしれりと思はん更にあたるへからす拙き人の碁うつ事はかりにさとくたくみなるはかしこき人の此芸におろかなるを見て我の智におよはすと定てよろつの道のたくみ我道を人のしらさるを見てをのれすくれたりと思はん事大なるあやまりなるへし文字の法師暗証の禅師たかひにはかりて己にしかすと思へることもにあたらす己か境界にあらさる

ものをはあらそふへからす是非すへからす

達人の人を見る眼はすこしもあやまる所あるへからすたとへは或人の世にそらことをかまへ出して人をはかる事あらんにすなほにまことゝおもひていふまゝにはからるゝ人ありあまりにふかく信をおこしてなをわつらはしくそらことを心得そふる人あり又何としもおもはて心をつけぬ人あり又いさゝか覚束なく覚てたのむにもあらすたのますもあらて

業しぬる人ハたりぬ風ことしくさ
おほしめさし人ハ芸の事なれと際を
あらんとそすゝめる人ハもたりぬ風よ
推しつえるうしきくしさきり
こうされつゝかしまみくぬされと作やく
しらぬ人ハたりぬまをしもくあされ
こゝめりと思ふらう物あやまちをこそ
あまとおやしむ人ハたゝまぬつとめるこそし
なつまくりとみはらてまらぬ人ハたゝ
みちるえされしくしされりともいはず

おほけかなうしらぬハよくぬことれくさぬ
人ともれしやすくきる人ハたりぬまめ
そうこそのなさとたしめかたき心えさく
すこしもあさむ寺野へむしらる人と
おもしのよめりきかをあらする人多
道者の中のたいつれくまさりける人の
おりくハ此ま風くのえうる前羽れ
くほまそしうくれなくさてまめなし
ましてあやうかれりん人ハ芸風とくふ
むかしをえんことたるなちるのよれあと

是ハむかし但馬のくにゝありける寺
仏法まてとゞまらぬへきにこそあれ
或人久我なりけるをとふらはんとて小袖を
あつかりこゝろ人ハ木作りの地蔵を
田の中の水にひたしてのちあるに
あらひなかしけれハみな頭に精家堂
男二三人出きてあつまりさしまいりて
かの人をとらへてすなはち父母内大臣殿
ふるきおもしろかりける寿命におほしまいらせける
時ハ神妙にやんことなき人にておはしけり

東大寺の祈與東寺のあまた家にも護持
源氏のために年々まいりけるに比叡大将にて
御さとをはなれけるを右衛門の社にて
驚いて御へりけれとやすくけれハ
諸衆の縁舞ハ兵仗なとあまたのこなし
とりなをしけるきさて夜に御まいりけれハ
かの朝臣ハ小山判官の西家の説を
しりさまけれ春屋の悪魔悪神を恐
時にも神社をまつりとてこれをなし
たりとそ御ゆるしけり

諸寺の僧のことをかゝす定額の女孺と
いふ事延喜式にみえてきまをつくす
所をまもる人の通名なりけるを
楊名介よりかゝす楊名目といふものも
ありし政事要略にあり
横笛の行宮法聲下の所にハ唐土ハ呂の
曲おほく律の曲すくなし和国ハ単律の曲おほく
呂の曲すくなしといへり
呉竹ハ葉ほそく河竹ハ葉ひろし清涼殿によ
たてるハ河竹仁寿殿まへにあるよりさ

植たるハ呉竹なり
退凡下乗の卒都婆あり下乗ハ下乗内なる
ハ退凡なり
十月を神無月と云て神事にはゝかる
つきなりしハ出雲にあつまり給ふといふを
見えすたゝし当月諸社のまつりなよ
いへりあまたある祭ハ月よろつの神
なるを神家へあつまり給ふといふ説あ
まして其説なりされハ伊勢
ハかならす祭月とまへきなりその例しなり

十月諸社奉行幸これ例をあり　但あり
て不吉の例なり
勅勘(ちよくかん)者府よ拷(かう)へらる作法(さほう)有ハたしく
あれる人也主上の御悩(ごなう)大ろく世中の
さハかしきよりハ多条の天下より拷を
うけらる獄(ひとや)よ籠(こめ)ぎめて御下とて拷せ
られあり　ある計なり首(かう)籠(ごの)長の員
ある拷をうけまよわさらしゆれハ人も入らす
然絶てなしとの世よハ對をつくるよ
ありけり

犯人をとらへてうつ時ハ拷問(がうもん)によせてかい
つらね拷問の様しよろ作法も有
ハうきまにしまる人也しとう
比叡(ひえい)山より大師勧請(くわんじやう)の起請(きしやう)と云ハ
慈恵(じゑ)僧正云そしめ始なり起請文と
いふ事法曹(ほうそう)にはこれを沙汰なりしへの
聖代(せいだい)まつて起請文よつくさることなりき
政ハなすれをも代はる事流布(るぶ)しておか
み法令よりハ水火よ穢(けがれ)をそへて入れけりハ
けるまあるてし

徳大寺右大臣殿検非違使の別当の
時中門にて使庁の評定をこなはれける
程に官人章兼か牛はなれて庁のうち
へ入て大理の座のはまゆかの上にのほりて
にれうちかみて臥たりけり重き怪異
なりとて牛を陰陽師のもとへつかはす
へきよし各申けるを父の相国きゝて
うしに分別なし足あれはいつくへか
のほらさらん尩弱の官人たま／＼出仕の
微牛をとらるへきやうなしとて牛をは

ぬしにかへして臥たりける畳をは
かへられにけりあへて凶事なかりけると
なんあやしみを見てあやしまさる時は
あやしみかへりてやふるといへり
亀山殿たてられんとて地をひかれける
に大きなるくちなは数もしらすこりあつま
りたる塚ありけり此所の神なりと
いひて事のよしを申けれはいかゝあるへきと
勅問ありけるにふるくより此地をしめ
たる物ならは左右なく掘捨られかたしと

みな人申されけるにこのおとゝ一人王土に
をらん虫皇居をたてられんに何のたゝり
をかなすへき鬼神はよこしまなし
とかむへからすたゝみなほりすつへしと
申されたりけれは塚をくつして蛇
をは大井河になかしてけりさらに祟なかりけり

経文なとの紐をゆふにかみしもよりたすき
にちかへて二すちの中よりわなの
かしらをよこさまにひきいたす事はつねの
事なりさやうにしたるをは華厳院の
弘舜僧正ときてなほさせけりこれは
このころやうの事なりいとにくし
うるはしくはたゝくるくるとまきて
うへよりしもへわなのさきをさしはさ
むへしと申されけりふるき人にてかや
うの事しれる人になん侍りける

人の田を論するものうたへにまけて
ねたさにその田をかりてとれとて人を
つかはしけるにまつ道すからの田をさへ
かりもてゆくをこれは論し給ふ所に

いかにかくハといひけれハかるものともその
所とても刈へきことはりなけれとも
僻事せんとてまかる者なれハいつくをか
からさらんとそいひけることはりいとお
かしかりけり

よふこ鳥ハ春のものなりとはかりいひて
いかなる鳥ともさたかにしるせる物なし
或真言書の中によふこ鳥なく時招魂の
法をハおこなふ次第ありこれハ鵺なり
万葉集の長歌に霞たつなかき春日の
なとつゝけたり鵺鳥も喚子鳥のことさまに
かよひてきこゆ

万の事ハたのむへからすおろかなる人ハ
ふかく物をたのむゆへにうらみいかる
事ありいきほひありとてたのむ
へからすこはき物まつほろふ財おほしとて
たのむへからす時の間にうしなひやすし
才ありとてたのむへからす孔子も時に
あはす徳ありとてたのむへからす顔回も
不幸なりき君の寵をもたのむへからす

誅(ちう)をうくる事すみやかなり奴(やつこ)にまさつかり
そて形へつらすむさほりなしつ当つけあさを
人の志をもつむさほりしかわすまさを
約をも遂(とけ)へつらす信ある事まことなし
身をも人をもたのまされハ是なり何ハ
よろこひ非なる所をうらみをなさいろ
けれハさかりすき前後をわすれハかけたります
せわしき時ハひけくる心ある事
ハしこゝろしてこゝろしこゝ何ハことのよ
さらひあらそひやかつゆるくしく

やしなふ所ハ一毛もそんせす人ハ天
地の霊(れい)なり天地ハかろきともからなし
人ハ本性あらすこゝろをあらし寛大(くわんさい)にして
こゝハまことある所にて喜怒(きど)をまさりて退て
わかたかりまつる守
秋の月ハかきりなくめてゝみるのなり
何をそも月ハ不くもりあまたこゝろ
まつさんハ人ハむまれ心するへこゝ事と
此花の火煙(くわゑん)よ火(ひ)をなく何を火を退さくて
そつむ事なりこゝうけよきたてちよ

うつすべし されはころびおちぬやうに心えて
炭をつむべきなり八幡の御幸に供
奉の人浄衣をきて手にて炭をさゝ
れハある有職の人白きものをきたる日は
火箸をもちゐるくるしからずと申されけり
想夫恋といふ楽ハ女おとこをこふる故
の名にハあらず本ハ相府蓮文字のかよへる
なり晋の王倹大臣として家にはちすを
うへて愛せし時の楽なり是より大臣
を蓮府といふ廻忽も廻鶻なり廻鶻国とて

えびすのこはき国なり其夷漢に伏して
後にきたりておのれか国の楽を奏せしなり
平宣時朝臣老のゝちむかしかたりに
最明寺入道あるよひのまによはるゝ事
ありしにやかてと申なからひたゝれの
なくてとかくせしほどにまた使きたりて
直垂なとのさふらはぬにや夜なれは
ことやうなりともとくとありしかは
なへたる直垂うちうちのまゝにてまかり
たりしに銚子にかはらけとりそへて

この酒をひとりたうべんがさう
ざうしければ申つるなりさかなこそ
なけれ人はしづまりぬらんさりぬべき
物やあるといづくまでももとめ給へと
ありしかば紙燭さしてくまぐまを
もとめし程に台所の棚にこかはらけに
みその少しつきたるを見出てこれぞ
もとめえて候と申しゝかば事
たりなんとて心よく数献に及びて
興に入られ侍りきその世にはかくこそ

侍りしかと申されき
最明寺入道鶴岡の社参のついでに足利
左馬入道の許へまづ使をつかはして
立入られたりけるにあるじまうけられ
たりける様一献にうちあはび二献にえび
三献にかいもちひにてやみぬその座には
亭主夫婦隆弁僧正あるじかたの人
にて座せられけりさて年ごとに給はる
足利の染物心もとなく候と申されけれ
ばよういし候とて色々の染物三十

三十疋まへにて女房ともに小袖にてうせさせて
のちにつかはされけりその時見たる人のちかく
まて侍りしかかたり侍しなり
或大福長者のいはく人はよろつをさし
おきてひたふるに徳をつくへきなり
まつしくてはいけるかひなしとめる
のみを人とす徳をつかんと思はゝ
すへからくまつその心つかひを修行すへし
その心といふは他の事にあらす人間常住
の思ひに住してかりにも無常を観する
事なかれ是第一の用心なり次に万事の
用をかなふへからす人の世にある自他につけて
所願無量なり欲に随て志をとけん
と思はゝ百万の銭ありといふとも
しはらくも住すへからす所願はやむ時
なし財はつくる期ありかきりある財を
もちてかきりなき願にしたかふ事
うへからす所願心にきさす事あらは
我をほろほすへき悪念きたれりとかたく
慎みおそれて小要をもなすへからす

次に諂(てん)をやめよこゝろへつらひ
わらひかほしつゝはなはた貪吝(とんりん)をまもる
へつらひする者のこゝろ邪にしてとうま
たしなみて志とへへつらひなきなれ
次にすなほなる心といふはいつはり
なくむさる事なかれ次に正直にして
約をたかへすして不義(ふぎ)をまもりて利を
もとめん人は富(ふう)に到る事火のもゆるよ
りはやき水のながるゝよりもすみやかに
あらはし諂つもりて悪くなれは

宴飲(えんいん)聲色をこのみて守居所をまもる
す所領をもちて厚き心にこもりたる子
やからのためしとてか採人は所領を成
さんのふは賊をとりて讒と賊とすゐ
事は弱みひをとるなすつるの内へ取り所領
あまたのためにす寸讒あまたもちぬるには
金銀(きんぎん)おほくためし何をかためしひとせん
はなはだしくしてはてゝ人目の望をたちて貧を
うまへつらすとこゝにしく欲を成て
食ひし喰をせんよりはまし賊なりし人には

癰疽をやむ者水にあらひてたのしひと
せんよりはやまさらんにはしかしこゝに
いたりてハ貧富わく所なし究竟ハ理即
ひとし大欲ハ無欲ににたり
きつねハ人にくひつくものなり堀川殿にて
とねりかねたるあしをきつねにくはる
仁和寺にて夜本寺のまへをとおる下法師
にきつね三とひかゝりてくひつきけれハ刀を
ぬきてこれをふせく間狐二ひきをつく
ひとつハつきころしぬ二ハにけぬ法師ハあまた
所くはれなからことゆへなかりけり
四条黄門命せられて云龍秋ハみちにとりて
ハやんことなきもの也先日きたりて云
短慮のいたりきはめて荒涼の事なれと
よこ笛の五の穴ハいさゝかいふかしき所の
侍るかとひそかにこれを存ス其ゆへハ
干の穴ハ平調五の穴ハ下無調なり其あひ
に勝絶調をへたてたり上の穴双調次に鳧鐘
調をおきて夕の穴黄鐘調也其次に鸞鏡調を
おきて中の穴盤渉調中と六とのあはひに

神仙(しんせん)調あり。かやうに間々に皆一律を
ぬすめるに五の穴のみ上の間に調子を
もたずしてしかも間をくばる事ひとしき
ゆへに其声不快(ふくわい)なりされば此穴を吹時は
かならずのくのけあへぬ時は物にあはず
吹得る人かたしと申き料簡(れうけん)のいたり
誠に興あり先達後生をおそるといふ事
此事なりと侍りき他日に景茂(かげもち)が申侍りしは
笙(しやう)はしらべおほせてもちたればたゞ
吹ばかりなり笛は吹ながらいきのうちにて

かつしらべもてゆく物なれば穴ごとに
口伝のうへに性骨をくはへて心をいるゝ
こと五の穴のみにかぎらずひとへに
のくとばかりもさだむべからずあしく
吹ばいづれの穴も心よからず上手は
いづれをも吹あはす呂律の物にかな
はざるは人のとがなり器の失にあらず
と申き

何事も辺土はいやしくかたくななれども
天王寺の舞楽(ぶがく)のみ都にはぢずといへば

天王寺の伶人の申侍りしハ當寺の楽ハよく
圖をしらへあハせてものゝ音のめてたく
とゝのほり侍る事外よりもすくれたり
故ハ太子の御時の圖今に侍るを博士とす
いはゆる六時堂のまへの鐘なり
その聲黄鐘調のもなかなり寒暑に隨ひて上り
さかりあるへき故に二月涅槃會より
聖靈會まての中間を指南とす秘蔵の
事なり此一調子をもちていつれの聲をも
とゝのへ侍るなりと申しき凡鐘の聲ハ

黄鐘調なるへし是無常の調子祇園精舎の
無常院の聲なり西園寺の鐘黄鐘調に
いらるへしとてあまたゝひいかへられ
けれともかなハさりけるを遠國よりた
つねいたされけり浄金剛院の鐘の聲
又黄鐘調なり
建治弘安のころハまつりの日の放免の
附物にことやうなる紺の布四五反にて馬
をつくりてをにはとうしみをして蜘蛛の
いかきたる水干につけて

歌のこゝろなといひてわたりし事つねに
見及ひ侍しなとも興ありてしたる心
地にてこそ侍しかと老たる道志ともの
今日もかたり侍るなり此比ハ付物を
としを送て過差ことの外になりて
よろつのおもき物をおほく付て左右の
袖を人にもたせて自らはほこをたに
もたすいきつきくるしむ有様
いと見くるし
竹谷(たけや)の乗願房(じようぐわんばう)東二条院へまいられたり
けるに亡者の追善には何事か勝利
おほきと尋させ給ひけれは光明真言(こうみやうしんごん)
宝篋印陀羅尼(ほうけういんだらに)と申されたるを弟子
ともいかにかくハ申給ひつるそ念仏にまさる事
さふらふましとはなと申給はぬそと申
けれハ我宗なれはさこそ申さまほしかり
つれともまさしく称名(しようみやう)を追福(ついふく)に
修して巨益(こやく)あるへしと説ける経文を
見及はねは何に見えたるそと重て
とはせ給はゝいかゝ申さんとてなり

本経のたしかなるにつきて此真言陀羅尼
をは申つるなりとそ申されける
鶴のおほいとのは童名たつ君なり鶴を
かひ給ける故にと申は僻事也
陰陽師有宗入道鎌倉よりのほりて
たつねまうてきたりしかまつさし入て此
庭のいたつらにひろき事あさましく
あるへからぬ事なり道をしる物はうふる
事をつとむほそみち一つのこしてみな
はたけにつくり給へといさめ侍き

誠に少しの地をもいたつらに
をかん事は益なき事なりくふ物
薬種なとをうへをくへし
多久資か申けるは通憲入道舞の手の
中に興ある事ともをえらひて磯の禅師と
いひける女におしへてまはせけり白き
水干にさうまきをさゝせ烏帽子をひき入
たりけれはおとこまひとそいひける禅師か
むすめしつかといひける此芸をつけり
是白拍子の根元也仏神の本縁をうたふ

これハ源の光行おほく作れり
後鳥羽の院の御作もあり亀菊におしへ
させ給ひけるとそ
後鳥羽院の御時信濃前司行長稽古の
ほまれありけるか楽府の御論義の番に
めされて七徳の舞を二つわすれたりけれは
五徳の冠者と異名をつきにけるを心う
き事にして学問をすてゝ遁世したりける
を慈鎮和尚一芸ある物をは下部
まてもめしをきてふひんにせさせ給ひけれは

この信濃入道を扶持し給ひけり此行長入道
平家物語を作りて生仏といひける盲目
にをしへてかたらせけりさて山門の事を
ことにゆゝしくかけり九郎判官の事ハくは
しく知りてかきのせたり蒲の冠者の事
はよくしらさりけるにやおほくの事とも
をしるしもらせり武士の事弓馬のわさハ
生仏東国の物にて武士にとひきゝてかゝせ
けり彼生仏かむまれつきのこゑを今の
琵琶法師ハまなひたるなり

六時礼讃は法然上人の弟子安楽といひ
ける僧始メとあつめて造て勤めけり
それより泰山の普観坊といふ僧ありて世を
のがれて都明よりありて一念多念佛の
宗也後醍醐院の御代にあたりてまたむ
法事讃しあわせて普観坊りしはかる也
千部の釈迦念佛ハ文永のころ如導上人
是をはじめられけり
よし細工ハほこしらへする刀を作りしが
又妙観の刀ハいましたす

五条内裏をたてけるにありけり花大納言殿
つくりの御物ハ厳上人ところとりき
基をとらんとすはりて書きみるもの
なりたてと見むきまれて桶人のすり
作いたさしめてさうらをあまた桶よせ
ごとまかせて桶とひけるにありまた末孫の桶
なりけるとしてはりけること
我身の刹高入道ハさうけふ庖丁者なり
あら人老りとかくいふしこと鯉をとりて
なりけるをみる人刹高入道これ庖丁を

見なやと思ひてたゆまくよういそんも
いうせたかうひけるを別当へきこえける
人々は此経百日の経をとこう御をとし日
かきはしめへこうりあるすまけさやうましそ
こうしきはりけしくつよくまたく奥ある
まく人へしこつりまうとある人小山乃
太政入道殿りかうやこれらときはれは
そやの事そのきはよりうるさく
おかゆうなりこうりめくこさ人なくは達へ
こうんとひさうんてる紙よるきなん

如法百日の経をとこうんうとみてこひ
こうしおりしくおかしくと人のこうり
終まうりをおし大つく振舞て奥ある
よるとも奥ありてやまうりありうの御さり
こう事ありまれ人の参意なとものりそ
おしこきやうようりありうも御てとり
よくれしたくこう事となくてうりむう
そうし人よあをとうせうるも作弁と
なうく達をくそまうんとひうる御
よの心さうしありおりしむかりしたく

こはれんと思ひ勝負のまけわさに
ことつけなとしたるむつかし
すへて人ハ無智無能なるへきもの也
ある人の子の見さまなとあしからぬか
父のまへにて人と物いふとて史書の文を
ひきたりしさかしくはきこえしかとも
尊者のまへにてハさらすともと覚えし也
又ある人のもとにて法師の物語を
きかんとて琵琶をめしよせたるに柱の
ひとつおちたりしかハ作りてつけよと

いふにある男の中よりあしからすと見
ゆるかふるきひさくの柄ありやなといふ
を見れはつめをおほしたり琵琶なと
ひくにこそめくら法師のひハその沙汰に
もおよハぬ事なり道に心えたるよし
にやとかたはらいたかりきひさくの柄ハ
ひものきとかやいひてよからぬ物にとそ
ある人仰られし　わかき人ハすこしの
事もよく見えわろくみゆるなり　よろつの
とかあらしと思はゝなに事にもまことありて

世にたけき人をはなをやさしく
こと葉もなさけありいはし男女
老少これなき人もうけなれとも
わかきたる人のこゝろうしきを
またいくおもひはかれこのあり
よろけのこゝろはなれたる事はよけなき
所えたる事しらして人をないかる
まなりけるも
人のおもとひこゝろよそはしをたらし
ありのまゝよいをんはたこの事しとや

心またもはやうかりかつてしかしくゝ
よからぬ事わりさりぬるの事をなを
はかりと思てやよからん世の中てより
しらぬ人もなとりなからんかぬしつふ
そひさの嫁たらんはおとはしくこゝろし
なまし人はいまゝこそまよそぬ事を
わかさりけるまゝよそでも人のすみ
あさましきなとかりそひやうけれを
いつわりことのあるかりとなりしこゝ
といはやかてこゝろはかゝる事なれ世する

ふりぬる事をもをのづからきゝもらす
あたりもあればおぼつかなからぬやうに
つげやりたらんあしかるべき事かは
かやうの事はものなれぬ人のある事也
ぬしある家にはすゞろなる人こゝろのまゝに
いりくる事なしあるじなき所にはみちゆ
き人みだりに立入狐ふくろふやうのもの
もひとけにせかれねばところえがほにいり
すみこだまなどいふけしからぬ
かたちもあらはるゝものなり又

かゞみには色かたちなきゆゑによろづのかげ来り
てうつるかゞみに色かたちあらましかば
うつらざらまし虚空よくものをいる
我等が心に念々のほしきまゝに
きたりうかぶも心といふもののなきに
やあらん心にぬしあらましかば
胸のうちにそこばくの事はいり
きたらざらまし
丹波に出雲といふところあり大社を
うつしてめでたく作れりしだの某

なにかしとかやしる所なれは秋のころ
聖海(しやうかい)上人その外も人あまたさそひて
いさ給へ出雲(いづも)をかみにかいもちひめさ
せんとてくしもていきたるにおの
〳〵をかみてゆゝしく信おこしたり御前なる
獅子(し)狛犬そむきてうしろさまに
たちたりけれは上人いみしく感して
あなめてたやこの獅子のたちやういと
めつらしふかきゆへあらんと涙くみて
いかに殿原(とのはら)殊勝(しゆしやう)の事は御らんしとかめすや

むけなりといへは各あやしみて誠に
他にことなりけり都のつとにかたらんなと
いふに上人猶ゆかしかりておとなしく
物しりぬへきかほしたる神官(しんくわん)をよひて
此御社の獅子のたてられやうさためて
ならひある事に侍らんちとうけたまはらはやと
いはれけれはその事に候さかなきわらはへ
ともの仕りける奇怪(きくわい)に候事なりとて
さしよりてすゑなをしていにけれは
上人の感涙(かんるい)いたつらになりにけり

やないはこにすゆるものはたてさま
よこさまものによるへきにや巻物なとハ
たてさまにおきて木のあひより紙
ひねりをとほしてゆひつくすゝりもたてさまに
おきたる筆ころはすよしと
三条右大臣殿おほせられき勘解由小
路家の能書の人々はかりにもたてさま
におかるゝ事なしかならすよこさま
にすへられ侍りき
御随身近友か自讃とて七ケ条かきとゝめ
たる事あり皆馬藝させる事なき事
なりその例をおもひて自讃の事七あり
一 人あまたつれて花見ありきしに
最勝光院の辺にて男の馬をはしら
しむるを見て今一度馬をはするものならハ
馬たふれておつへししはし見給へ
とて立とまりたるに又馬をはすとむる所にて
馬をひきたふしてのる人泥土の中に
ころひ入そのことはのあやまらさる事
を人みな感す

一當代春宮坊におはしましゝ時よ
万里小路殿御所ありしに堀川大納言殿
祗候し給ひし御さうしへよりありく
まゐりありしに繪詞のてゑこの巻を
くりひろけ給ひつゝたゝ此御所まく
むかしのあけくれなとをよくむかし
にゑを御覧されさうなりき
御前を御らんせられし時御覧し出されし御気色
れいよくひなみなと作てとふらひはへるとなむ
ありと作り給ふに九乃巻のすこしの

程に給ひとたまへしかはあるまかれしとて
かくまいらせ給ふさまの事ハ見にさるゝ
其の事なれとむかしの人にはこの志
事ともいみしく自讃しあそはれ
後鳥羽院の御手に袖と袂と一首の
うたよみたまはせんやと定家つかう
まつらせあそはせられける
秋の野の草のたもとか花すゝき
ほにいてゝまねく袖と見ゆらんと侍しハ
何すゝのつまへ入とさされたる事し

時にあたりて本歌を景情寸尺の冥加(みやうが)
高遠(かうゑん)なりなとおもしくまうすへし
作者なり九条相国伊通(これみち)公の歎状(たんじやう)にも
こと葉の事なきよし題目をいつれの世にて
自讃(じさん)せられけるなり

一 書写院玄宗つよ縁の端(はし)ハ至愚(ありぐ)の
事なり行房(ゆきふさ)卿の清書していふより
此さえんとせしよりの入道
の草をとりて見せ給ひけり
花のおもかげを尋れハ都百里より
きこえとてよりけり湯(すい)唐韻(たうのいん)とみゆるよ
百里あまりのとこゑをしとらう
見せそそまつりまうすのまつりなせとそ
筆者のりをへつひやりにうよあるまり
作りける枝(すい)すずりとあそとるてとる事
作りき枝りもいつありつきてりつゝも
枝歩の心のおもひけれ
枝行あら式にて枝ハ空にて好明鏡
空及歩不実好りかき
このゆきちろゝなり

一人あまねくしるところの三塔順礼の事

何にても横川の中堂より般若院

とのまゐりけるに義あまた作理行成なれば

ころひあそくいまさ淡吉寺とやつてくゝ

ありし堂僧どもしくや何しを行成

すけもとりつきこて作理すつゐへく

ゑき有へつぬすといひくはしまひよくろうは

鶯つまり虫の巣まてくみきけれどを

よくきえのちひくとなく見何なり

り成位署名字号所えりよみて給ひ遍六八

一人みな奥なり入

那蘭陀寺まてさ眼ひし旦筏筆にてよ

い災と云事を尋す法くこれやむかし

給とひりしを所化これあやしく遍よ

つね日の内よきを出まじくしまやとひ出

遍ををひくみしく感し何と

一貫助僧正ありまく大かた所ひくかね香水を

み何しよいまきをそてぬなとうり僧正

かつりく何よ陣の前まで僧都みなを

法師どもにとのへしてまゐりさきするなり

おなしさまなる大衆おほくてえもとめ
あはすといひていとひさしくてい
てたりしをあなわひしそれもとめておは
せよといはれしにかへり入て
やかてくしていてぬ

一

二月十五日月あかき夜うちふけて
千本の寺にまうてゝうしろより入て
ひとりかほふかくかくして聴聞し
侍りしに優なる女のすかたにほひ人よりこと
なるかわけ入てひさにゐかゝれは

にほひなともうつるはかりなれはひん
あしと思てすりのきたるになをゐより
ておなしさまなれはたちぬそのゝちある
御所さまのふるき女房のそゝろこといは
れしついてにむけに色なき人におはし
けりと見おとし奉る事なんありしなさけ
なしとうらみ奉る人なんあるとのたまひ出
したるにさらにこそ心えはへらねと申
てやみぬこの事なりしを後

みつほねのうちより人
の御覧しゝりてさふらふ女房を
作りたてゝいたし給ひてひんよくハ
こと葉なとかけんものそそのありさままいりて
申せ興あらんとてはかり給けるとそ
八月十五日九月十三日ハ婁宿（ろうしゆく）なり此宿
清明（せいめい）なる故に月をもてあそふ良夜と
すしのふのうらのあまのみるめも所せく
くらふの山もまもる人しけからんにわり
なくかよはん心の色こそ浅からすあはれと
思ふふしゝの忘かたき事もおほからめおや
はらからゆるしてひたふるにむかへすへ
たらんいとまはゆかりぬへし世にありわふ
る女のにけなき老法師あやしの
あつま人なりともにきはゝしきにつけて
さそふ水あらハなといふを中人いつ
かたも心にくきさまにいひなしてしられす
しらぬ人をむかへもてきたらんあいなさよ
何事をかうちいつることの葉にせん
年月のつらさをもわけこし葉山のなとも

あひかまへてつみをせぬ人の果にて
もたちかまへて余所(よそ)の人言より
内のすゑひたすらそて心つよ仰さこと
おわりをしよ女なるんよつまを
まるくなり見よくどしも多年なん
男ハ尿くあやまちのあまあまてを
とつてよき人やハとく人てもちろとより
きられわ才ハむつひかなるんもうけ
あつしくむかしるへいをてあいな
うらめむかのなれかなしき衣乃

おなじ月なりたゞすこみのさかひにて露
まけいてんを雨のころもわが身にかゝり
あのあるへくもなからん人ハそのこ
のまゝらんなりハ志かし
わか月のまゝめかすハ志かしかくを
任をすやそのけぬちかとめぬ人ハ一
衣の中なりさまくかりの事もみぬめ
しやかなん病のなくろし往生の瘵(やまひきり)せて
死期(しご)すくよちかしされとてつまる病息
なかす死なりおもむかさるほどハ孝経

平生の念にならひて生の中に多くの
ことを成してのちにしづかにみちを修せんと
思ふ程に病をうけて死門にのぞむ時
所願一事も成ぜずいふかひなく
て年月の懈怠を悔てこのたびもし立
なほりて命をまたくせば夜を日に継て
かの事をおこたらず成してんと
願をおこすらめどやがておもりぬれ
ばわれにもあらずとりみだしてはてぬ
此たぐひのみこそあらめ此事まづ

人々いそぎ心におくべし所願を成じ
てのちいとまありて道にむかはんとせば所願つく
べからず如幻の生の中になにごとをかなさん
すべて所願皆妄想なり所願心にきたら
ば妄心迷乱すと知て一事をもなすべからず
直に萬事を放下して道にむかふ時さはり
なく所作なくて心身ながくしづかなり
こゝろしるべし遠離によりて所作なき事はひ
とへに苦樂のあはり樂といふぞ
あのこれを行事なりとしれとなむ

やむ事なし樂欲(げうよく)すると云ふ一には名利
名に三種あり行法と才藝(さいげい)との所作也
二には色欲三には味なりよろづの事に
あるこにはなつすゝき顛倒(てんだう)の起より
おもりく我こそくのまつりは行なりとも
さるんつりはたゞし
ハよなりし無文に向ていたく佛を
いのちおよりゆるんといふ文かいをく
仏より八人のものよりなりとみ回人含
何として仏には成やらんと又々仏宗

なしへよよりまく物ありとなるにみよ
とよへ付るの佛とはちかふのなしへ付るとも
み答まれしみこゝの仏乃なんしへよまり
て成給ありとみ向こなるしへてうしめ
你るのすへ一の仏はいの物の仏よりゆるとも
いは何文元よるやかりるたるとてや
つきろんといゆくつらよるといつめるもる
えたるへすなりゆけと諸人よろうりく
奥しき

以下
3丁
白紙